

日蓮大聖人御書全集

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事

だいしょうにん

おんやまい

こと

（大聖人の御病の事）

新版
1926
〜
1927

うえのどののははごぜんごへんじ

だいしようにん

おんやまい

こと

上野殿母御前御返事（大聖人の御病の事）

こうあん

ねん

がつ

にち

弘安4年（'81）

12月8日

60歳

さい

うえののあま

しんじよう

うえのどののははあまごぜん

にちれん

進上 上野殿母尼御前

日蓮

のうまいいち 駄

せいじんひと

筒

にじゆう

提

乾

薑

一

乃米一だ、聖人一つつ二十ひさげか、かんこうひと

紙袋

送

た

そうら

お

こうぶくろ、おくり給び候い了わんぬ。

所

様

前

々

もう

古

そうら

このところのよう、ぜんぜんに申しふり候いぬ。さては、

いぶんえいじゆういちねんろくがつじゆうしちにち

やま

い

そうら

去ぬる文永十一年六月十七日、この山に入り候いて、

ことしじゆうにがつようか

やま

い

いっぽ

今年十二月八日にいたるまで、この山、出ずること一歩も

そらら
はちねん
あいだ
瘦
病
もう
齢
もう

候わす。ただし、八年が間、やせやまいと申し、としと申

年々
み弱
こころ老耄
そうら
ことし

し、としどしに身ゆわく心おぼれ候いつるほどに、今年は

はる
病起
あき過
ふゆ
至
ひび

春よりこのやまいおこりて、秋すぎ冬にいたるまで、日々に

衰
よよ
勝
そうら
じゅうよにち

おとろえ夜々にまさり候いつるが、この十余日はすでに

しよく
殆止
そうろううえ
雪
重

食もほとうどとどまりて候上、ゆきはかさなり、かんはせ

そうろう
み冷
いし
むね
冷
こおり

め候。身のひゆること石のごとし。胸のつめたきこと氷の

ごとし。

酒
温
差
沸
乾
薑

しかるに、このさけわたたかにさしわかして、かんこうを

食
き
いちど飲
そうら
ひ
むね
焚

はたとくい切つて、一度のみて候えば、火を胸にたくがご

とし。ゆ湯に入るに似たり。あせ汗にあかあらい、しずく滴に足をあし

濯 おんこころざし

すすぐ。この御志はいかんがせんと、うれしくおもい候

りようがん

一

涙

浮

そうろう

ところに、両眼よりひとつのなんだをうかべて候。

真

こぞ

くがついつか

故ごろうどの

隠

まことや、まことや、去年の九月五日、こ五郎殿のかくれ

むね打

騒

指

折

数

にしはいかになりけると胸うちさわぎで、ゆびをおりかず

そうら

にかねんじゅうろくつきしひやくよにち

過

そうろう

え候えば、すでに二箇年十六月四百余日にすぎ候か。

はは

おん

音

信

そうろう

聞

たま

それには母なれば御おとずれや候らん。いかにきかせ給

わぬやらん。

降

ゆき

降

散

はな

咲

そうら

ふりし雪もまたふれり。ちりし花もまたさきて候いき。

むじよう

帰

聞

そうら

無常ばかり、またもかえりきこえ候わざりけるか。あら

恨

よそ

良冠者

うらめし、あらうらめし。余所にてても、「よきかんざかな、

たま

おとこ

おとこ

幾瀬

よきかんざかな。玉のようなる男かな、男かな。いくせ、

親

嬉

思

見そうら

まんげつ くも

懸

おやのうれしくおぼすらん」とみ候いしに、満月に雲のか

晴

やま い

盛

はな

かれるが、はれずして山へ入り、さかんなる花のあやなく

風

散

浅

覚

そうら

かぜにちるがごとしと、あさましくこそおぼえ候え。

にちれん

しよ 労

ひとびと

おんふみ

ごへんじ

もう

そうら

日蓮は所ろうのゆえに人々の御文の御返事も申さず候

歎

そうら

筆

いつるが、このことはあまりになげかしく候えば、ふでを

執

そうら

久

世

そうら

とりて候ぞ。これも、よもひさしくもこのよに候わじ。

いちじよう　べごろうどの　行　合　覚　そうろう　はは　先

一定、五郎殿にゆきあいぬとおぼえ候。母よりさきに

見　参　そうら　はは　歎　もう　伝　そうら　ことごと

げんざんし候わば、母のなげき申しつたえ候わん。事々ま

もう　きようきようきんげん

たまた申すべし。恐々謹言。

じゆうにがつようか

十二月八日

にちれん　かおう
日蓮　花押

うえのどののははごぜんごへんじ

上野殿母御前御返事